

20世紀初頭のハワイ日系仏教における 〈二重のナショナリズム〉の出現

高橋 典史

本稿の目的は、20世紀初頭のハワイにおいて、海外布教を展開した日系宗教教団にみられるナショナリズムの様相を明らかにすることにある。本稿では、ハワイ本派本願寺教団を事例に、日本をルーツとし、日系移民たちを主要な信者とする宗教集団が、日本とアメリカ合衆国の2つのナショナリズムのあいだでどのように展開していったのかを、宗教指導者の言説に注目して考察する。それにより、アメリカ化運動の高まりや排日運動の悪化といった社会状況のなかで、教団の指導者の主張が、日米の二者択一的なナショナリズムのあり方から、普遍性をもった仏教によって支えられた日米の〈二重のナショナリズム〉の特徴を有するものへと変容していったことを指摘したい。この宗教に依拠した〈二重のナショナリズム〉は、単一のネーションに収斂されないナショナリズムの状況適合的な使い分けといえよう。

1 はじめに

1-1 問題の所在

近代日本の宗教運動にみられるナショナリズムの問題を考える際、まず想起されるのは、近代国民国家の形成と表裏にあった天皇制ナショナリズムの生成と、無数の宗教運動の興隆との関係であろう。その問題に関しては日本の国内状況が最も重要であることに何ら異論はないが、近代以降、日本をルーツとする多くの宗教集団が、日本の帝国主義的な領土拡張や海外への移民の増加という海外膨張の趨勢のなかで、海外地域で多様な活動を行っていった事実も看過できない。とりわけ「日本」というナショナルな領域を越境した集団にとっては、日本と移動先の2つのネーションへの対応が必要であった。それゆえ、日本国外の日系宗教教団に注

目することは、単一の国民国家内に収斂されえない宗教とナショナリズムについての問題系を炙り出す意義があるといえよう。

そこで本稿では、ハワイへと越境した日系移民たちと密接にむすびついた日系仏教教団に注目することで、海外布教を行う教団が、日米の2つのネーションへのコミットメントの並存状態である〈二重のナショナリズム〉の特徴を有するものへと、いかにして変容していったのかについて考察を試みたい。

アメリカ合衆国（以下、「アメリカ」と略す）本土と同様、アメリカ化（同化）と排日の思潮が高まっていた20世紀初頭のハワイにおいて、日系移民¹たちに絶大な影響力をもっていた宗教指導者に、いまむらえみょう今村恵猛（1867-1932年）というハワイ本派本願寺教団（浄土真宗本願寺派、以下、「本派本願寺」と略す）の僧侶がいる。

本稿では、20世紀初めのハワイ最大の日系宗教教団であった本派本願寺を事例に、同教団が、前述の〈二重のナショナリズム〉をめぐる課題にどのように取り組んだのかを、特に教団の指導者の言説に焦点を当てて検討していく。

ここで、本稿の大まかな流れを示しておく。まず、次項では、先行研究の検討と本稿の基本的な分析枠組みを提示する。つづく第2節においては、本稿の議論が前提とするハワイにおける日系移民と本派本願寺の歴史の概要を紹介する。そして、本稿の議論の中心となる第3節では、今村の思潮が、20世紀初頭から1920年代後半にかけて、いかにして〈二重のナショナリズム〉の性格を有するものへと変容していったのかを考察し、稿を結びたい。

1-2 先行研究の成果とその課題

20世紀初めのハワイにおいて、最大の日系宗教教団であった本派本願寺については、いくつもの先行研究がある。まず、20世紀前半の本派本願寺の運動展開については、M. M. Gordonの同化理論を下敷きにして、教団の組織・制度レベルでの変容（アメリカ化）を考察した中野毅や、本派本願寺の繁栄に対して教団付属の日本語学校が果たした役割を論じた本多千恵らの研究があげられる（中野1981；本多1994）。

また、島田法子は、当時の本派本願寺の日系移民信者たちのアイデンティティに関して、開教初期においては、仏教による「日本人」としての「ナショナル・アイデンティティ」がおもに主張されていたが、1900年代になると仏教の「グローバル・アイデンティティ」も論じられるようになり、1900年代末以降、徐々に仏教を中核とする日系人の「エスニック・アイデンティティ」が強調されていったと指摘してい

る（島田2001）。

そして、本派本願寺の指導者であった今村恵猛の宗教思想については、守屋友江が、ハワイにおいてプラグマティズム哲学を受容し、アメリカの排外的なナショナリズムに対応していなかで、多元主義的な「アメリカ仏教」へと変容していった過程を詳細に論じている（守屋2001）。

これらの先行研究は、20世紀初めのハワイにおける本派本願寺の展開の一端を詳細に明らかにしているのだが、ナショナリズムに注目する本稿の関心から評価するならば、当時のハワイの日系移民たちと日系宗教教団が共有していた日米にまたがる多面的なナショナリズムの問題については、ほとんど注目されてこなかったといえる。

宗教を対象とした研究ではないものの、アメリカにおける日系移民のナショナリズムに関しては、移民・エスニシティ研究の分野で研究の蓄積がある。例えば、Y. Ichiokaは、1937年の日中戦争の開戦以降、日系社会のなかで高まった日本の愛国主義的思潮の高まりとそれに関連した諸活動を、「移民ナショナリズム (Immigrant Nationalism)」と呼んでいる (Ichioka 1990)。そして、南川文里も、第二次世界大戦前のカリフォルニア州における日系移民たちの移民ナショナリズムの高まりに関する考察から、当時の日系移民たちが、日米両国家の「狭間」において、アメリカの市民ナショナリズムを土台としつつも、「その上に日本の「民族」言説を重ね合わせることで、エスニック集団としての独自の地位を自己定義した」と論じている（南川2007: 163）。

Ichiokaや南川の移民ナショナリズムに関する研究は、1930年代以降のアメリカ本土の日系社会における日本のナショナリズムの著しい

高揚を論じたものであるが、本稿で注目するのは、1920年代のハワイにおける日系宗教教団の指導者の言説から析出される、日米の2つのナショナリズムの共存状態としての移民ナショナリズムである。

そこで、本稿では、移民ナショナリズムのなかでも、特に2つのネーションへの状況適合的なコミットメントの共存状態を名指すものとして、〈二重のナショナリズム (dual nationalism)〉の語を用いていきたい。というのも、アメリカ本土と同様、20世紀初めのハワイにおいても、日系移民たちはもちろんのこと、本派本願寺をはじめとする日系諸宗教もまた、日米の強力な2つのネーションから強い影響を受ける存在であったためである²。とりわけ、いわゆる排日移民法成立後の1920年代後半のハワイの日系集団³は、アメリカ社会への適応に迫られると同時に、祖国日本への愛着を根強く維持しているという困難な状況にあった。

そもそも、〈二重のナショナリズム〉とは、それほど頻繁ではないものの、移民・エスニシティ研究において使用されてきた概念である。D. Fitzgerald は、近年さかんに用いられているトランスナショナリズム論におけるナショナリズムを、「遠隔地ナショナリズム (long-distance nationalism)⁴」と「二重のナショナリズム」の2つの形態にはっきりと区別する。そして、前者が単一のネーションとの一体感であるのに対して、後者は2つの異なるネーションとの政治的な一体感であると論じている (Fitzgerald 2004: 230)。本稿でも基本的にはこの用法を踏襲するが、「政治的」だけでなく、「文化的」な一体感をも含めるものとして〈二重のナショナリズム〉を用いていく⁵。

2 20世紀初めのハワイにおける本派本願寺の展開

2-1 ハワイにおける排日論と日系仏教

20世紀初めのアメリカでは、西海岸を中心に激しい排日運動が起こり、いわゆる排日移民法の成立にいたった (1924年施行)。19世紀末以来、日本からの移民が大規模なコミュニティを形成していたハワイ⁶における排日運動は、アメリカ本土と比較すると穏やかであったと指摘されている⁷が、日系移民に対する白人支配者層からの批判や抑圧は皆無ではなかった。ハワイにおける排日論は、日本からの移民の初期においては、日系移民たちの風俗、文化、宗教、生活態度への批判が主であったが、やがて日系2世が増加する時期になると、出生率の高さ、日本への「祖国愛」、アメリカへの忠誠心の疑わしさ、二重国籍などに対する批判へとシフトしていった (ハワイ日本人移民史刊行委員会⁸ 1964: 280-2)。つまり、時代が下るにつれて、日系移民の国家への帰属意識が批判の対象となっていくのである。

1910年代後半から1920年代にかけては、第一次世界大戦を契機に愛国主義的なアメリカ化の風潮が高揚したアメリカ本土と同様、ハワイにおいても、白人支配者層を中心にアメリカ化が叫ばれて、日本の文化や言語が批判されていった。なかでも特に問題視されたのが、日系移民労働者によるプランテーション・ストライキと、本派本願寺も数多く運営していた日本語学校の存在であった。とりわけ後者は、アメリカ市民である日系2世に対する「日本の国民教育」と批判された。1920年には外国語学校取締法がハワイ準州議会で可決されたため、日系移民側はそれに反対して提訴し、連邦最高裁に裁判が持ち込まれるまでに事態は紛糾する

(1927年に日系移民側が勝訴)(移民史 1964)。

こうしたアメリカ化と排日の風潮のもとでは、キリスト教の重要性が強調された一方で、仏教を中心とする日系宗教は反アメリカ的な存在として排斥された。実際には、神社神道や日系新宗教も活動していたのだが⁹、最も勢力の大きかった仏教が、日本のナショナリズムを代表する存在として、白人支配者層から批判の矛先を向けられたのである¹⁰。そして、日系社会の内部においても、圧倒的多数派であった仏教勢力と、少数ではあったが白人支配層と協調したキリスト教勢力は対立した。

2-2 本派本願寺のハワイ開教とその展開

本派本願寺は、第二次世界大戦前のハワイの日系社会において、圧倒的に巨大なエスニック・チャーチであった¹¹。当時の日系社会の宗教は、本派本願寺がその代表だったのである。

ハワイにおける日系仏教の布教開始は、日本からの移民集団と密接に関係しており、移民を多く送出した広島、山口、福岡県に強い地盤をもつ浄土真宗本願寺派(西本願寺)が、ハワイの日系仏教のなかで最大の宗派となった¹²。当初は本山と直接関係のない僧侶たちが自発的にハワイで布教活動を行っていたのだが、信者たちから僧侶の派遣を請願された本山は、1897年にハワイ布教を正式に開始している(常光 1971: 78)。

近代日本において浄土真宗をはじめとする仏教諸宗派は、アジア地域で積極的に海外布教を展開していったけれども、ハワイにおける本派本願寺の布教活動は、アジアにおけるものとは事情が異なっていた。ハワイの本派本願寺が発行した資料には、開教初期においては、日本の本山はアジア地域での布教に力を入れていたため、ハワイでの布教活動を支援する余裕がなく、

ハワイでは「独立自給の方法」を講じる必要があったという記述がある(本派本願寺 1918: 28-9)。それゆえ、ハワイにおける本派本願寺の活動は、現地の人々の裁量に任される部分も大きかったと推測される。

ハワイにおける本派本願寺は、おもに日系2世たちを対象とした仏教青年会や仏教婦人会などを組織し、日本語学校や日曜学校を運営した¹³。また、社交・運動・娯楽機関を設置したほか、機関誌を発行し、経典の英訳、日系2世僧侶の育成、アメリカ人僧侶の招聘、各種の社会事業や救済事業への参加、「他人種」への布教などを展開して、教団のアメリカ化を進めた(移民史 1964: 229-30)。

このような教団のアメリカ化のなかで特筆すべきは、教団組織の改変である。ハワイの日系社会においては、日本のような檀家制度は成り立たないため、仏教教団も信者の代表者たちによって組織が運営されるアメリカの宗教制度に従っていく必要があった(本派本願寺は、1907年にハワイ準州から正式に認可されている)。本派本願寺では、1923年に開教使(僧侶)たちのみであった教団運営会議を、信者代表を含めた議制会へと改変した。この時期の本派本願寺の宗政機構の変容について、中野毅は、聖職者中心から信者中心の教団支配への移行であると指摘している(中野 1981: 66)。

以上のように本派本願寺が、ハワイにおいて革新的な事業を展開していった大きな要因の1つが、教団のトップであった今村恵猛の卓越したリーダーシップである。例えば、1912年当時、ハワイの日本総領事代理であった来栖三郎は、日本語学校間の競合が問題となっていた状況下で、「今村総長の下に本願寺の一団は宛然『本願寺王国』の感があつた。『総領事さんが何う仰しやっても、御法主さんが申されねばき

かれません』と言はれる様なことが実際にあった」(移民史 1964: 234)とのちに述懐している。また、1960年9月9日には、当時のハワイ大手の日系新聞であった『ハワイ・タイムズ』紙上に、「日米修好百年並に官約移住七十五年祭」を記念して実施された、「過去七十五年間を通じて最も傑出したと思われる草分日本人」に関するアンケート結果が掲載され、その上位4名のなかに今村の名前もあがっている。これらの記事からも、今村が宗教者の枠をこえた日系社会の指導者であったことが分かるだろう。

3 教団指導者の言説における国家帰属の問題

3-1 「日系移民＝日本国民」意識のゆらぎ

今村恵猛については、すでに守屋友江がその経歴と宗教思想の変遷を詳細に研究し、ハワイにおいて彼の思想が、日本のナショナリズムだけでなく、ユダヤキリスト教的伝統のうえにあるアメリカの「市民宗教」(ベラー)をもこえるものへと変容していった過程を、つまびらかにしている(守屋 2001)。守屋は、日米のナショナリズムを相対化していった今村の宗教思想の普遍的意義に注目している。一方、本稿では、社会学的な関心にもとづいて、当時の社会状況に対応した彼の言説の分析から、日米の2つのネーションの狭間で教団とその日系移民信者たちが生き抜いていくための、存続戦略ともいべきものを析出していきたい¹⁴。

ハワイの日系移民史において、これまで一般的にいわれてきたように、家族の呼び寄せ以外の新規渡航が不可能になる1908年の日米紳士協約の成立頃までの日系移民の大半は、契約労働者としてプランテーションなどで働く出稼ぎ移民であり、のちの時代になると「腰掛主義

と揶揄されたように、ハワイに定住せずに、なるべく早く賃金を稼いで日本へ引き揚げることを前提としていた(移民史 1964: 165)。それゆえ、彼らの日本国民としてのナショナル・アイデンティティは所与のものであり、当然のことながら本派本願寺と日本との関係も同様であったといえよう。

そのような「日系移民＝日本国民」という意識は、当然ながら今村も共有していた。その一例として、1904年に日系移民のプランテーション労働者たちが、大規模なストライキを決定した際、日本総領事たちによる調停が難航したため、今村がその調停を要請され、それに成功したことがあげられる(移民史 1964: 128)。今村は、のちの1913年に教団の機関誌『同胞』のなかで、当時のことを次のように回顧している。

然るに、結果は意外にも良好で、さしものに猛りたちたる同胞も、初一念をまげて業務に就くといふことになつた時には、私は偏に仏力の偉大なるに感泣した。日本国民は少なくとも、当地に於ける日本国民は陛下の赤子となると同時に、仏陀の赤子であると、深く感嘆せずには居られなくなつた。(今村 1937: 40)

ここで興味深いのは、日系移民たちの天皇制国家としての日本に対する帰属意識と並存するかたちで、彼らの仏教徒としてのアイデンティティが主張されている点である。すなわち、仏教者である今村においては、日本のナショナリズムと仏教のアイデンティティは、共存するものとして認識されていたのである。この宗教に立脚する立場は、その後も今村の主張の基調をなしていく。

ただし、このような日系移民信者の日本国民としてのアイデンティティを所与のものとする主張は、1908年の日米紳士協約の実施以降、日系移民のハワイへの定住化が進行していくなかで（本願寺 1918: 41-2）、変化していくこととなる。さらに1910年代以降になると、ハワイの白人支配者層のあいだで、日系仏教への批判が高まっていったため、本派本願寺はその対応に迫られていった。

日系移民の定住化と日系仏教批判の進行という社会状況下で、クローズ・アップされるようになっていったのが、ハワイ生まれの日系2世たちの存在である。日系2世は、アメリカ市民権をもっているという点で、日系1世とは決定的に性格が異なる存在であった。

今村は、1916年に『同胞』に掲載された「本願寺の教育事業」において、日系移民の児童たちのほとんどがハワイ生まれの日系2世となり、さらには、日系移民たちの定住化が進行しているため、教団の付属学校は公立学校と児童の家庭とのあいだの仲介役となる「家庭教師」としての役割へと事業の方針を改めると述べている。しかしその一方で、今村は、本派本願寺が日系移民の児童に日本への「忠君愛国主義」を鼓吹しているという白人支配者層からの批判を取りあげて、アメリカ市民権をもつ日系2世たちに対してはアメリカへの忠誠を説くが、アメリカへの帰化が禁じられている日系1世たちは日本国民であるしかないのだから、彼らに日本への忠誠を説くのは当然であると反論している（今村 1937: 83-7）。

今村が、1910年代後半からの排日論の高まりと日系2世の増加という状況のなかで、日系移民のナショナル・アイデンティティを世代ごとに区別して対処していくと主張するようになったことは、アメリカのナショナリズムへの

対応という新たな課題に取り組む必要性が、本派本願寺に生じたことを示している。教団レベルでも、本派本願寺は、1916年から日系移民のハワイ社会への適応を促す市民啓発運動に参加し、その翌年からは日系2世を対象とした日曜学校を開始している（布哇本派本願寺教団 1954: 25, 27）。

こうした本派本願寺の変化が決定的なものとなるのは、第一次世界大戦後の排日運動のさらなる悪化である。次項では、大戦後の1920年代前半におけるアメリカ化という社会的風潮下での、今村の主張の変容をみてみよう。

3-2 〈脱日本化〉の顕在化

日系移民や日系宗教への批判が高まる1920年代に入ると、今村の言説におけるアメリカ化の志向性はより明確になっていく。一例をあげるならば、アメリカの排日運動が悪化していったさなかの1921年に、今村が発行した『米国の精神を論ず』という小冊子がある。そのなかで今村は、アメリカ社会の理念や規範にもとづいて排日論に反駁し、日系移民と仏教の存在の正当性を主張して、次のように述べている

- 一、アメリカニズムの名に於て他の宗教宗派を排斥することは、明白にアメリカニズムに背反し、アメリカニズムの濫用であると云う事。
- 二、アメリカニズムは決して完成したものでなくして、現に完成しつつあるもの。死したる典型に籍入されたものではなくして生成発育中にある、変化適応自在なるものであると云ふ事。
- 三、アメリカニズムは決して純一無雑排他的なものではなくして、凡てを抱擁し網羅し之をたとえば百川を吞吐する大海の如く万

星を羅列する大空の如きものであると云ふ事。(今村 1921: 12)

さらに「米国精神の信条」として「良心の独立」と「信教の自由」をあげ、それに続けて、アメリカ社会の人種・民族構成の多様性を説明し、アメリカが「混和融合の過程」にあると論じている(今村 1921: 15, 30, 39)。

また、今村は、日系仏教を日本の天皇制と結びつけて批判するアメリカの世論についても言及して、本派本願寺と天皇制ナショナリズムとの関係を否定し、仏教の社会的意義を主張している。例えば、「仏教と社会奉仕」(『同胞』、1921年)のなかで今村は、次のように反論している。

今日米国人中にも尚仏教を以て天皇崇拜教だとか、本願寺と皇室とは密接不離の関係があつて、布哇の本願寺は其筋の内意でも受けて帝国主義の宣伝にでも来て居る様に思つて居る人が多い相である。然しこんな事は最早我等の問題ではない。事実と真理とは抜く事の出来ぬ強い力を持つて居る。(今村 1937: 145)

そして、仏教における慈善の精神の重要性をあげ、「大慈善＝真諦＝信仰的方面」、「小慈善＝俗諦＝社会的方面(通俗的方面)」という浄土真宗の「真俗二諦」の思想を紹介し、日本における仏教の社会事業の歴史を説明している。そのうえで、ハワイの日系移民信者たちに対しては、「吾人の在住せる国土と人民と建国の精神を諒解尊重し」、「自ら生活の改善に努力すると共に」、「米人其他と親和提携」することを求めている(今村 1937: 148-53)。

さらに今村は、脱民族宗教化した普遍宗教と

しての仏教のアメリカ社会における意義も、日系移民信者たちに対して強調していく。1922年に『同胞』に掲載された「仏教徒の覚悟」には、次のような文章がある。

……この徹底した無常観より云へば、我々には何処を此処と執着すべき本国も故国もない訳である。……故に仏教徒は先ず第一に自国他国、本国異国という心慮を脱落しなければならぬ。(今村 1937: 162)

それに続けて今村は、仏教の教えに従えば、「国家」、「血族」、「民族」などに執着することは誤りであるとし、特定の民族に限定された「儒教」、「印度教」、「猶太教」などの保守的な民族宗教とは異なる仏教やキリスト教が、「他国異人種間」で「繁昌」しているのは、これらが信者に信仰を「自由選択」させ、社会の革新を行う宗教であるためだと述べている(今村 1937: 162-6)。このような主張の前提には、アメリカ社会の理念としての「信教の自由」があることはいうまでもない。

以上のように今村は、第一次世界大戦後のアメリカにおける排日論の悪化のなかで、アメリカ社会の理念と仏教思想を接合させ、さらには仏教の社会的有用性や普遍的意義を強調することで、厳しい社会状況に対応していった¹⁵。それゆえ、この時期の今村の言説に関しては、アメリカのナショナリズムの圧倒的な影響のもとで、本派本願寺と日本との関係性を後景化させて、普遍宗教としての仏教の価値を主張し、教団と日系移民信者たちのアメリカ化を促進させようとする〈脱日本化〉の志向性を指摘できるだろう。

こうした今村の論調の〈脱日本化〉への変容は、英語伝道の本格化、日系2世やアメリカ

人の僧侶の育成や招聘、教団運営の議制会への
改変といった本派本願寺の諸活動と照応してい
る。ただし、この時期においても本派本願寺の
活動は、一方向的なアメリカ化ではなく、直面
する問題ごとに対応するものであった。例えば、
プランテーション・ストライキでは日系移民労
働者の支援を行うなど、日系移民側に立った活
動を行っている。また、1922年には今村の決
断により、本派本願寺系列の日本語学校は外国
語学校取締法に反対する訴訟に参加し、1927
年に連邦最高裁で違憲判決を勝ち取った（布哇
報知社 1937: 151）。さらに 1923 年の関東大
震災の復興支援も行っている（布哇本派本願寺
教団 1954）。

この時期の本派本願寺の〈脱日本化〉は、あ
くまで状況適合的に進行しており、日本的なも
のへのコミットメントは後景に退いていただけ
だったと考えられよう。実際、今村の言説にお
いても、排日運動の結実ともいえる 1924 年の
排日移民法の施行以降、〈脱日本化〉への反動
のように、再び日本との結びつきを強調するよ
うな主張が展開されていくのだ。

3-3 〈二重のナショナリズム〉の出現

〈脱日本化〉を進めていった今村であるが、
排日移民法の施行後の 1920 年代後半になると、
アメリカ化を志向しつつも、日系 2 世たちに対
して、日本人や日本文化の優秀性を強調する主
張が散見するようになる¹⁶。

1927 年、今村は、本派本願寺の付属学校の
機関誌『校友会誌』に「卒業生諸君に希望す」
という小論を発表して、次のように論じている。

一、日系市民たる我卒業生諸君は各民族の特
長を發揮するに好適地たる此布哇に於て飽
迄国際的精神に立脚し、我が民族特有の美

徳を以て国利民福に価値ある貢献を為すべ
く努力するが天職なり。（今村 1937: 220）

同様の主張は、同年に発表された「同窓会諸
君に希望す」（『校友会誌』）においても述べら
れている

一、日系市民の先輩者たる諸君は布哇に於け
る次代同胞の現状に鑑み自他内外の事情
を洞察し、不屈不撓の精神を以て我民族優
秀の特長を發揮すべき強き矜持と強き責
任の感を有すべきこと。（今村 1937: 221）

これらの言説からは、今村がアメリカ市民権
をもつ日系 2 世信者たちに対して、文化的な日
本のナショナリズムを喚起しようとしていたこ
とがうかがえる。もちろん、それは、この後の
1930 年代にアメリカの日系社会で発生する、
日本に対する愛国的思潮の高まりとしての
移民ナショナリズムの高揚とは、性格を異にし
ている。

そもそも、1920 年代以降は、日系 2 世たち
が成人し始め、ハワイの日系社会においても「架
け橋論」（アメリカ文化を身につけ日本民族の
血を引く日系 2 世が、日米の融和の媒介者とな
るという思想（東 2005: 224））が叫ばれた時
期である¹⁷。今村における文化的な日本のナシ
ョナリズムを強調するような言説の発生も、日
本社会におけるナショナリズムの高揚の影響だ
けでなく、1920 年代以降、排日の状況が悪化
していくなかでのハワイの日系社会の動向とも
関連しているだろう。

ただし、今村の主張は、仏教者としての独特
な性格をはらんでいる点は看過できない。なぜ
ならば、この時期の今村の言説においても、日
米の 2 つのナショナリズムと、仏教、とりわけ

浄土真宗とを結びつけるものが見出せるためである。

例えば、今村は、昭和天皇の即位の大礼に際して、1928年に「御大礼と仏教徒」を発表したのだが、そこでは、仏教と日本のナショナリズムを明確に接合させる主張がなされている。

抑仏教が欽明天皇の御代に吾が日本帝国に伝来しましてから、代々の天皇これを尊崇あらせられ、国民教化に大御心を注がせられたので、皇室と仏教との関係は実に深きものがありました。……のみならず吾が祖先は仏教によりて初めて印度アリアの精神主義的文化を受けまして、吾が祖先に固有の精神的審美的感受性に之を摂取包容して実功的に価値づけ、特殊の日本文化を産み出したのであります。(今村 1937: 226)

そして、日本の歴史において仏教が果たしてきた社会文化的に重要な役割、特に浄土真宗の国家への貢献を強調して、ハワイにおける積極的な布教を求めている(今村 1937: 226-31)。

また、1928年の夏に本派本願寺では、布哇仏教青年会の主催により、日系2世を中心とする学生母国見学団(日系市民母国見学団)の一行28名を日本へ派遣し、約2ヶ月間にわたる滞日中、各地で歓迎を受けた¹⁸。それに対する今村の「感謝の辞」が、翌年、『母国見学記念誌』の冒頭に発表された。そのなかで今村は、「吾人は夙にこれ等日系市民に対して多大の関心を払ひ、学園、青年会、日曜学校、青年教団等の施設によりて、善良なる米国市民として身を立て世に出でしめんための教化、教養に専ら微力を尽」くしてきたと述べている(布哇仏教青年会 1929: 1)。さらに以下のように書いている。

……星条旗下に生まれて米国市民としての教育を受けつゝある彼等は、血縁的には純然たる日本人にてありながら、日本を知らず、日本人の長所美点を学ぶ能はず、日本文化の価値を理解するに至らざるは、吾人の見て以て誠に彼等の不幸なりとするところ……。(布哇仏教青年会 1929: 1)

ここでも今村が、「日本人」の文化や精神性のアメリカ社会における積極的意義とともに、本派本願寺の諸活動の重要性を論じていることが分かるだろう。

こうした今村の主張における、仏教(浄土真宗)に裏打ちされた文化的な日本のナショナリズムの強調は、決してアメリカ社会の理念や規範と背反するものではなかったことは、あらためて指摘しておく必要がある。1928年の「我が卒業生に望む」(『交友会誌』)には、次のような言葉がある。少し長いが引用しよう。

余は我が布哇中学校及び高等女学校の卒業生がよくこの仏教の平等主義と無常論とを体得して、自己を以て東洋と西洋の異ならざること東洋人の必ず西洋人となり得ることを証明して、以て滔々たる米国の俗論を覚醒せんことを希望して已まざるものである。左に米国憲法の語と仏陀の聖言を示さん。

Constitution proclaims that: "All men are born free and equal"

Lord Buddha said; "Not by birth does one become an outcaste, not by birth does one become a high caste: by deeds one becomes an outcaste, by deeds one becomes a high caste." (今村 1937: 234-5)

この引用からも読み取れるように、今村の

主張は、普遍性をもった仏教を媒介とする日米の2つのナショナリズムの並存、すなわち〈二重のナショナリズム〉の性格を有しているのである。

以上のように今村は、1920年代後半になると、アメリカへの適応を基調としつつも、アメリカ市民である日系2世信者たちに対して、日本人や日本文化の優秀性を主張していくようになった。つまり、日米のナショナリズムと接合できるようになった仏教（浄土真宗）は、日本のナショナルなステイグマを刻印されつつも、ハワイ社会を生き抜かねばならなかった教団とその日系移民信者たちが動員できる文化資源とされたのだ。この時期の今村は、白人主流社会とのあいだに人種やエスニシティ、宗教の壁があった数多くの日系移民たちが、仏教に依拠する日米の〈二重のナショナリズム〉の主体的かつ状況適合的な使い分けを行う可能性を、模索していたのではないだろうか。

ちなみに、この時期の本派本願寺は、前述した1928年の学生母国見学団の日本派遣¹⁹、大正天皇崩御に際しての法要なども行っている。そして、ハワイでの功績により、1928年に今村は瑞宝章を受勲する（布哇本派本願寺教団 1954）。さらに本派本願寺が中心となり、1930年にホノルルで開催された第1回汎太平洋仏教青年大会には、ハワイ、北米、日本、朝鮮などからも代表者が参加し（本派本願寺 1931: 8-14）、本派本願寺の組織力の大きさを示した。今村における〈二重のナショナリズム〉の出現の背景には、こうした日本と関係した本派本願寺の諸事業の展開も少なからず影響しているだろう。

4 おわりに

移民集団と深く結びついて海外布教を行う宗

教集団も、移民集団と同じように複数のネーションの強力な磁場から大きな影響を受ける。本稿では、20世紀初めのハワイ最大の日系仏教教団であった本派本願寺を取りあげて、教団の指導者の言説におけるナショナリズムの変容を考察してきた。

1910年代以降のアメリカ化運動や排日運動の高揚とともに仏教が批判されていくなかで、ハワイの本派本願寺では、アメリカ化を積極的に推進していった。教団のリーダーであった今村恵猛の信者たちに対する言説においても、1910年代以降、〈脱日本化〉の志向性が顕著となる。しかしながら、排日移民法成立以降の1920年代後半になると、アメリカ社会への適応を前提としつつも、文化的な日本のナショナリズムを主張していくようになった。

本稿では、このような今村のナショナリズムをめぐる論調の変容が、日米の2つのナショナリズムと接合されうる仏教（浄土真宗）を動員することによって、日米の〈二重のナショナリズム〉を主体的かつ状況適合的に使い分ける方途を、日系移民信者たちに提供しようとする試みであったと指摘した。そして、それは、彼だけの理想論などではなく、当時の日系移民信者の思潮と共鳴するものだった。前述の布哇仏教青年会主催の学生母国見学団に参加したある日系2世の女性（当時18歳）は、次のような感想文を残している。

……我が父母の国は実に立派なものであるとの誇りを感じずにはゐられない、……私も出来得る限り布哇に於て日本を正しく外国人に紹介ませう。終りに臨み、私は布哇の一隅から日本の進歩発達と、そしてその尊い国体の永久に保たれることを祈ります〔句読点ママ〕。（布哇仏教青年会 1929: 86）

さて、今村が死去する 1932 年以降の本派本願寺であるが、その性格は「日本化」へと傾いていったとされる（守屋 2001: 219-22）。そこには、卓越した指導者を失ったという教団内在的な理由もあることは間違いないが、すでに述べたように、1930 年代以降、アメリカの日系社会においては、内外のさまざまな要因により、日本に対する愛国的な思潮が非常に高揚していったことも大きく影響しているだろう。それゆえ、今村存命時までの本派本願寺は、日米の困難な諸問題に直面しつつも、〈二重のナショナリズム〉を使い分けることで、社会状況へのある程度の自律的な対応を示すことが可能であったと考えられる。それは、ハワイの日系宗教教団における、単一の国民国家には回収されえない宗教と〈二重のナショナリズム〉のつかの間の共生関係の生成であったといえるのではないだろうか。

そして、そのような共生関係は、その後の日米関係の悪化、そして何よりも、1941 年の日本海軍によるパール・ハーバーへの奇襲と、それに続くアメリカ政府による日系宗教の活動禁止および宗教者たちの強制収容という、日米の 2 つの強力なネーションの圧倒的な暴力の発動により、完全な崩壊を余儀なくされるのである。

注

¹ 本稿では便宜上、日系 1 世と第 2 世代以降を包含する語として「日系移民」を用いる。

² 東栄一郎も、大戦前のアメリカ本土における日系 1 世を中心とした日系移民たちのアイデンティティについての研究のなかで、自らのアプローチを「間国家的視座 (inter-National perspective)」と定義して、日本とアメリカという 2 つの国家（「帝国」ともいえる）に挟まれた人々の「間隙的 (interstitial)」

な経験を考察している (Azuma 2005: 5-6)。

³ ここでいう「日系集団」の語は、日系移民のみならず、日系宗教教団などの日本をルーツとした諸集団も含めている。

⁴ B. Anderson の「遠隔地ナショナリズム」の議論 (Anderson 1992=1993) に影響を受けたアメリカの日系移民に関する研究としては、坂口満宏 (2001) があげられる。

⁵ アメリカでは、1990 年代後半以降、移民・エスニシティ研究やトランスナショナリズム論の進展に影響を受けて、Rudolph and Piscatori eds.(1997)、Warner and Wittner eds.(1998)、Ebaugh and Chafetz eds.(2002) など、移民集団と宗教の関係性についての研究が数多く提出されている。日本においても、吉原和男らが、日本国内のアジア系移民のエスニシティと宗教に関する研究成果を発表している (吉原・ペトロ編 2001)。

⁶ アメリカ合衆国のセンサスによれば、1920 年時点のハワイ準州の総人口は、255,912 人、白人人口 57,742 人、日系人人口 109,274 人である。以下のホームページを参照 (2008 年 3 月 6 日閲覧)。

<http://www.census.gov/population/documentation/twps0056/tab26.xls>

⁷ 当時の日本の外務省も、排日運動の激しいアメリカ本土と比べて、ハワイの日系移民の状況が恵まれていると報告している (亜米利加局第一課 1936: 111-2)。

⁸ 以下、「移民史」と略す。

⁹ ハワイにおける日系諸宗教の展開については、柳川・森岡編 (1979; 1981) を参照。

¹⁰ 排日期のハワイにおける日系宗教批判については、Hunter (1971) や守屋 (2001) を参照。

¹¹ 中嶋弓子によれば、当時のハワイの日系移民の大多数は仏教徒であり、その 3 分の 2 にあたる約 10 万人が本派本願寺の信者であったという (中嶋 1993: 178)。

¹² 現地ハワイで発行されていた『日布時事布哇年鑑』(日布時事社、1929年)によれば、当時のおもな日系仏教宗派の概況は次の通りである。本派本願寺…別院1ヶ所・布教場35ヶ所、大谷派本願寺…別院1ヶ所・布教場5ヶ所、浄土宗…開教院1ヶ所・布教場15ヶ所、曹洞宗…別院1ヶ所・布教場8ヶ所、真言宗…別院1ヶ所・布教場12ヶ所、日蓮宗…別院1ヶ所。

¹³ もちろん、これらの事業の多くは、近代以降、日本国内の仏教教団においてもキリスト教の影響により行われてきた。本稿で強調したいのは、ハワイの本派本願寺がアメリカ化を意識しつつ多様な事業を急速に展開していった点である。

¹⁴ 今村恵猛が、アメリカ化と民族的なアイデンティティをいかに論じたかについては、不十分ながら拙稿、高橋(2006)の一部ですでに論じている。本稿は、それをさらに発展させて、ナショナルリズムという新たな視点から、今村の言説と本派本願寺の変容の考察を試みるものである。ただし、本稿で取りあげる今村の言説の多くは、高橋(2006)では扱っていないものであるため、事例の提示という点では2つの論文は相補的關係にある。なお、今村恵猛の著作のほとんどは、遺稿集である『超勝院遺文集』(1937年)に収められている。本稿ではそのほかにも、『米国の精神を論ず』(1921年)、『母国見学記念誌』(1929年)も取りあげる。また、初出の年については、守屋(2001: 283-6)を参照した。なお、引用に際しては、旧字体を新字体にあらためて、旧かなづかいは原則的にそのまま引用し、ルビ等は省略した。

¹⁵ ただし、仏教的な普遍性に依拠した今村の言説も、当時のアメリカ社会におけるアングロ・サクソンを頂点とする人種とエスニック集団のヒエラルヒー構造に、強く制約されたものであった(高橋2006: 287-8)。

¹⁶ 島田法子は、今村における「日本人優越論」の発生を、1930年代の日本の急激な軍国主義化に影響を受けたハワイの日系社会における「愛国心」の高揚に関連づけている(島田2001: 203-4; 島田2003: 46)。しかし、本稿で確認するように、今村の「日本人優越論」は1920年代後半からすでにみられており、そこにはハワイの日系社会特有の背景もあったと考えられる。

¹⁷ 物部ひろみは、ハワイの日系2世を、1920年代に成人した年長のグループと、1930年代後半以降に成人し、第二次世界大戦後にハワイの政財界でおおいに活躍する若いグループとに区分している。前者のグループは、「米化」の名のもとに「大和民族の世界的発展」という日系1世たちの思想を受け入れつつも、アメリカへの忠誠を誓ってアメリカ社会へ適応していった人々であり、「100%アメリカン」と「太平洋の架け橋」という相反する2つの概念を、状況適的に使い分けることで両立させていたという(物部2007: 81-4)。

¹⁸ そもそも、「見学団」とは、1925年にサンフランシスコで発足したものをその嚆矢とし、日米親善の役割を担う日系2世の育成を目的とした日本への研修旅行である。1930年代には、アメリカ各地の日系社会で活発に催され、1941年の日米開戦まで続いた(Azuma 2001: 241-2)。「見学団」の詳細については、イチオカ(1994)などを参照。

¹⁹ ちなみに、1910年代に始まるハワイの日系2世たちの日本留学は、前述の1930年の第1回汎太平洋仏教青年大会における日本との交流で活発化し、1932年の満州事変の勃発以降、おおいに盛んになる。1938-9年の全盛期には、日本滞在中のハワイ生まれの留学生は約2000名にものぼり、日本全国にほぼ同数の「帰日2世」(日本へ引き揚げた日系2世)がいたという(移民史1964: 250)。

文献

- 垂米利加局第一課, 1936, 『北米日系市民概況 (米一調書第四号)』(外務省発行).
- Anderson, Benedict, 1992, "The New World Disorder," *New Left Review* 193. (= 1993, 関根政美訳「〈遠隔地ナショナリズム〉の出現」『世界』第 586 号, 179-90.)
- , 1998, *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia, and the World*, London, New York: Verso.
(= 2005, 糟谷啓介ほか訳『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社.)
- Azuma Eiichiro, 2001, "Kengakudan", Brian Niiya ed., *Encyclopedia of Japanese American History: an A-to-Z reference from 1868 to the present (Update Edition)*, New York: Checkmark Books, 241-2.
- , 2005, *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America*, Oxford/ New York: Oxford University Press.
- 東栄一郎, 2005, 「二世の日本留学の光と影——日系アメリカ人の越境教育の理念と矛盾」吉田亮編『アメリカ日本人移民の越境教育史』日本図書センター, 221-49.
- Ebaugh, Helen Rose and Janet Saltzman Chafetz eds., 2002, *Religion across Borders: Transnational Immigrant Networks*, Walnut Creek, CA: AltaMira Press.
- Fitzgerald, David, 2004, "Beyond 'Transnationalism': Mexican Hometown Politics at an American Labour Union," *Ethnic and Racial Studies* 27(2): 228-47.
- Gordon, Milton M., 1964, *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins*, New York: Oxford University Press.
- 布哇仏教青年会, 1929, 『母国見学記念誌』布哇仏教青年会.
- 布哇報知社編集局, 1937, 『日本語学校勝訴十周年記念誌, 1927-1937』布哇報知社.
- 布哇本派本願寺教団, 1954, 『御門主御巡教記念 布哇本派本願寺教団沿革誌』布哇本派本願寺教団.
- ハワイ日本人移民史刊行委員会, 1964, 『ハワイ日本人移民史』布哇日系人連合協会.
- 本多千恵, 1994, 「キリスト教社会における日本宗教の布教ストラテジーと適応——第 2 次世界大戦前のハワイ社会における浄土真宗本派本願寺教団の事例をめぐって」『年報社会学論集』第 7 号, 73-84.
- , 1995, 「第二次世界大戦前のハワイにおける浄土真宗本派本願寺の日本語学校——ホノルルを拠点とした布教活動との関連で」柳田利夫編『アメリカの日系人—都市・社会・生活』同文館, 173-97.
- 本派本願寺布哇開教教務所文書部, 1918, 『本派本願寺布哇開教史』本派本願寺布哇開教教務所文書部.
- , 1931, 『本派本願寺布哇開教三十五年紀要』本派本願寺布哇開教教務所文書部.
- Hunter, Louise H., 1971, *Buddhism in Hawaii: Its Impact on a Yankee Community*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Ichioka, Yuji, 1990, "Japanese Immigrant Nationalism: The Issei and the Sino-Japanese War, 1937-1941," *California History* 69: 260-75.
- イチオカ, ユージ (樋口秀実訳), 1994, 「見学団——日系二世による日本研究旅行の起源」上山和雄・阪田安雄『対立と妥協——一九三〇年代の日米通商関係』第一法規出版, 281-308.
- 今村恵猛, 1921, 『米国の精神を論ず』金尾文淵堂.

- , 1937, 『超勝院遺文集』 布哇ホノルル本願寺.
- 前山隆, 1997, 『異邦に「日本」を祀る——ブラジル日系人の宗教とエスニシティ——』 御茶の水書房.
- 南川文里, 2007, 『「日系アメリカ人」の歴史社会学——エスニシティ、人種、ナショナリズム』 彩流社.
- 物部ひろみ, 2007, 「ハワイ日系二世のアイデンティティと政治参加」 米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動——在外日本人・移民の近現代史』 人文書院, 79-100.
- 守屋友江, 2001, 『アメリカ仏教の誕生——二〇世紀初頭における日系宗教の文化変容』 現代史料出版.
- 中嶋弓子, 1993, 『ハワイ・さまよえる楽園——民族と国家の衝突』 東京書籍.
- 中野毅, 1981, 「ハワイ日系教団の形成と変容——本派本願寺教団と日系コミュニティ」 『宗教研究』 第 55 巻 1 号 (通巻 248 号), 45-72.
- Rudolph, Susanne Hoeber and James Piscatori eds., 1997, *Transnational Religion and Fading States*, Boulder, CO: Westview Press.
- 坂口満宏, 2001, 『日本人アメリカ移民史』 不二出版.
- 島田法子, 2001, 「20 世紀初頭のハワイにおける仏教開教と文化変容——『同胞』にみられるアイデンティティの変化を中心に」 戸上宗賢編『交錯する国家・民族・宗教——移民の社会適応』 不二出版, 179-211.
- , 2003, 「ハワイにおける日系人仏教にみる文化変容とアイデンティティ」 『立教アメリカン・スタディーズ』 25 号, 33-51.
- 高橋典史, 2006, 「排日期ハワイ日系社会におけるアメリカ化と宗教——日系人宗教指導者の言説に注目して——」 『一橋論叢』 135 巻 2 号, 279-298.
- Tamura, Eileen H., 1994, *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity: the Nisei Generation in Hawaii*, Urbana: University of Illinois Press.
- 常光浩然編, 1971, 『布哇仏教史話——日本仏教の東漸』 仏教伝道協会.
- Warner, R. Stephen and Judith G. Wittner eds., 1998, *Gatherings in Diaspora: Religious Communities and the New Immigration*, Philadelphia: Temple University Press.
- 柳川啓一・森岡清美編, 1979, 『ハワイ日系宗教の展開と現況——ハワイ日系人宗教調査中間報告』 東京大学宗教学研究室.
- , 1981, 『ハワイ日系人社会と日本宗教——ハワイ日系人宗教調査報告書』 東京大学宗教学研究室.
- 吉原和男／クネヒト・ペトロ編, 2001, 『アジア移民のエスニシティと宗教』 風響社.

(たかはし のりひと、宗教情報リサーチセンター／工学院大学、n_taka84@hotmail.com)
 (査読者 明戸隆浩、塚田穂高)

The Emergence of “Dual Nationalism” in a Japanese Buddhist Group in Hawaii during the Early Twentieth Century

TAKAHASHI, Norihito

In this article, I consider the change in the nationalism of a Japanese Buddhist group in Hawai'i during the early twentieth century. Subsequently, I examine the manner in which the religious group had developed both in Japan and in the United States, focusing specifically on the discourses of its religious leader. Based on this examination, I observe the situational accommodative use of “dual nationalism” in its development. Moreover, the significance of this article is that it clarifies a new aspect of the problems of religion and nationalism, which cannot be confined to a single nation state.